

## ★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

# ディスチャージ (放電) 第2章



文・写真／レイラ・アズナブル  
イラスト／エーカ

全寮制の男子校で、僕、夏木涼（なつき りょう）と同室となった林野柊（はやしの しゅう）は、異世界への旅を繰り返す異邦人だった。しかし、その事を僕が信じたのは、僕らが高校二年の晩秋、彼が次の世界へ旅立った後だった。それから、五年半の時間が過ぎ、大学卒業間際、僕らは再会した。

\* \* \* \* \*

僕が柊と一緒に住もうと提案した時に、僕は彼に断られるとは思っていなかった。幾度かの小さないさかいの後で、ようやく僕らは一緒に住む事になった。柊とふたりで僕の机や本棚を寝室に移し、一部屋を彼のために空けた。それから、彼の部屋の物を、空けた部屋に運び込んだ。それらの作業のひとつひとつが僕には楽しくて、常に

何かを彼に話し続けていた。柊は言葉少なに答えながら、いつもの柔らかな笑顔を作っていた。

全ての作業が夕食前には終わってしまった。それほど彼の持ち物は少なかったのだ。

『次の世界へ飛ばされる時、持つて行ける物は少ないよ』

柊のそんな言葉を思い出し、胸が痛んだ。

最後に小さなカバンひとつに着替えを詰めて、柊が僕の部屋のドアを叩いた。ワインとデリバリーのピザ。僕の作ったサラダ。そんな物を用意して僕は柊を迎えた。しかし、彼があまりうれしそうではない事に僕は落胆していた。夕食の間も、柊はあまり話をしなかった。

「寝るよ」

食事の後、柊は簡単にそう言って、自分の部屋に戻りドアを閉めた。柊が自分の部屋に入りドアを閉めただけなのに、僕はなぜ傷ついている

のだろう。

翌朝は早く目が覚めたので、コーヒーをいれ、目玉焼きを作り、柊を起こしに行った。

「要らない」

ぶつきらぼうに柊が言った。それが僕をいらだたせた。

「コーヒーだけでも飲め」

無言で答える柊。身じろぎもしない。

「今日の夕食はきみが作れ。ふたり分だ」

「作り方を知らない」

「これから教えるよ。だから起きろ」

「なんで僕が作らなきゃいけないんだ」

「僕は大学に行く。どうせきみは自分の分を作るんだ。ついでに僕の分も作った方が効率がいいだろう？」

無言。だが、のそのそと、ふとんから出てき

た。起きて来た柊に、簡単なメニューとレシピを渡し、炊飯器の使い方を教え、大学に向かった。

夕方部屋に戻ると、きちんと夕食ができていた。

「作り方、本当は知っていたんじゃないか？」

思わず笑顔になってしまう。

「知らない。でも、大体どこでも同じだ。切つて、味付けして、加熱する」

「ふうん」

誉められたと思つて、柊が喜んでいるのを感じた。

「今度の休みにはきみの物を買に行こう」

また、空気が硬くなる。

「少なすぎるよ。洋服も食器も」

「要らない」

「だめだ」

「…大体、金はどうするんだ。きみが払う気だろう？」

僕は思わず笑ってしまった。そんな事を気にしていたのか。

「母がカードを送つてよこしているんだ。一度は送り返したんだけれどね。でも、多分、罪滅ぼしのつもりだろうな。今まで一度も使った事は無かつたが、それを使うつもりだ。その方が彼女も喜ぶしね。」

それに、おやじからも定期的に僕の口座にまとまった入金がある。手続きをしているのは会計士だろうけれど。きみを探す事や、学費なんかに使つても結構余つたよ。

心配しなくていい。僕は金持ちなんだ」

柊が何か言おうとした。だが、何も言わず立ち上がり、部屋に戻ろうとする。僕の怒りは爆発した。

「言え！ 言いたい事は言えっ！」

テーブルを叩き立ち上がった。柊が驚いたように僕を見る。

「何か言おうとしたろう？ 隠すな。僕には隠さないでくれ」

短い沈黙の後、柊が絞り出すように話し始めた。

「…僕はいやだ。きみと家族ごっこをする気はない。要らないんだ。」

どうせ行く時には全部置いて行かなけりやいけないんだ。何も持ちたくない。いやだ」

泣きそうな顔でそう言いながら、しかし柊はその場から逃げなかった。僕は言葉が見つからず、おずおずと柊に近寄り、抱きしめた。柊が、僕の頭を子供をあやすように撫ぜながら、言った。

「なぜ、きみが先に泣くんだ」

うんざりしたような口調なのに、柊の感情が素直にその言葉に込められている事に、僕はむしろ安堵した。

「…悪かった。柊。ひどい言い方だった。けど、そんな事は言わないでくれ。」

家族ごっこでいい。今だけでいい。きみをしあわせにしたい」

返事は無かった。柊の体からゆつくりと力が抜けていった。そしてそのまま、消えていった。まいそうだった。

「きみはよく泣くなあ。感情が全部ストレートだ。怒る時も、泣く時も、笑う時も」

「……」

「…父も、そうだったよ」

唐突に柊が言った。

「きみの父親か？」

思わず顔を上げて柊を見た。彼はうつすらと

ほほえんでいる。

「ああ。高校の時には、本当はもうあまり覚えていなかったんだ。別れたのは八歳の時だからね。

「だけど、きみを見た時、そう思った。父によく似ている…」

覚えている。柗は、初めそれで僕に興味を持つ

たと言っていた。

「僕の父は、穏やかな人…だった。そう思っていた。」

でも、本当の父はきみのように激しい人だった。激しくて、でもそれを隠していた。きみのように」

「……」

「手をはなしてくれないか？ 涼。重いよ」

抱きしめていていると思っていた柗に、僕はしがみついていたらしい。手をはなすと、柗はゆつくりと僕から離れていき、部屋に戻った。

僕は、柗との間の壁がひとつ溶けていったのを感じた。感じながら、しかし彼にかける言葉を捜していた。言わなければいけない言葉が、残っているはずなのに、それがなにか分からなかった。

七年前に柗が僕の世界に来た時、公的機関



写真／レイラ・アズナブル

が、便宜上彼の戸籍を作っておいた。それがまだ残っていて、柊がこの世界に溶け込むための役に立った。

僕は隣町の大学の大学院に進学し、柊も同じ町の高校に編入した。そういつた手続きの間に、柊のための買い物をした。通学のための春服、夏服。靴、食器。洋服ダンス。ベット。柊は喜ばなかった。だが、拒否もしなかった。僕は楽しかった。母がカードの利用に関心を持たなかったら、僕は際限なく使っていたかもしれない。会計士から問い合わせの電話が入り、自分が使った事に間違いの無い事を答え、使うのをやめた。

夏前に、僕はもつと静かな所、通学に便利で、周りに畑や雑木林の残る小さな一軒家を探し、引越しをした。その方が以前の部屋よりも安くすんだ。それに、そこからならふたりとも歩いて学校に行ける。僕らはめだたないように、生活で

きる。朝食は僕が作り、夕食は柊が作った。

春から夏にかけて、次々と咲く花のひとつひとつを、柊が驚きを持って見ている事に僕は気づいていた。僕の世界に来たのが二回目とはいえ、以前はゆつくりと季節の花を見る余裕などなかっただろう。夕暮れ時の小さな庭で、雑草の花を、ぼんやりとながめている柊を見つける事があった。僕はそれだけで、ふたりで暮らして良かったと思えた。この暮らしを少しでも長く続けるためになら、僕はなんでもしただろう。

夏休みの少し前から、僕は家庭教師のバイトを始めていた。義父や母からの送金だけでも、充分にふたりでやっていける金額はあった。だが、僕は僕だけの力で、柊に何かをしたかった。

夏休み。バイト代で、近くの山のコテージを借りて、何日間かをそこで過ごす事にした。例に

よつて柗は嫌がったが、僕は押し切った。人ごみの中にいる時には、身を隠そうとしている柗に、他人の目の無い場所を与えたかった。レンタカーを借りて、食料品を買い込みでかけた。柗は終始無言で、反対の意思表示をしていた。コテージは小さかったが居心地は良さそうだ。柗にはめずらしいのか、熱心に見ていた。買い込んだ食糧を大型の冷蔵庫に入れ、部屋を確認し、ふたりの部屋を割り振る。

翌日、遅い朝食が終わり、今日の予定を決めようと、柗への言葉を捜していた。誰かがコテージのドアをたたいた。いぶかしく思いながらドアを開ける。そこに妹が居た。この前会ったのはいつだったろう。まだ一年もたっていない。これがまだ二回目だ。

「入ってもいいかしら？」

ドアに手をかけたまま立ちすくんでいる僕に、

彼女のほうから声をかけた。妹を招き入れ、ドアを閉めようとした。彼女が乗つて来た赤い車が少し離れた林の中に停まっているのが見えた。彼女の趣味だろうか、かわいらしい形の軽だった。

妹だと柗に紹介すると、彼の表情が変わった。マニュアルどおりの笑顔を作り、きびきびした動作でテーブルに誘う。さわやかな話し方。さっきまでの不愉快そうな彼はどこへ行った？

自分より背の高い彼を、少し見上げるようにしながら、ほほえんでうなづく妹。テーブルに置かれたつばの広い帽子と白い皮のバック。アンサンプルの、シンプルだが高そうな無地のサマーセーターとカーディガン。ひざまであるスカート。真っ黒でつやのある髪は、ストレートで長い。なにからなにまで良家のお嬢さんだ。親の手が行き届いている。彼女が、手にしたバックから茶色の封筒を出した。



「これ…」

そう言つて柊に渡す。中からは一冊のノートが出て来た。柊のノートだった。空気が一気に冷えたように感じた。初めて彼女に会つた時に、彼女に託した柊のノート。そこには柊の真実が、異世界の家族の事、繰り返される彼の旅の事が書かれていた。

「やあ、懐かしいなあ」

明るい声で柊が言つた。

「昔、僕が書いた小説だ。涼にあげたやつだよね。」

こうみえても、僕は昔、小説家志望だったんですよ」

とまどつたように妹が僕を見た。初めて彼女に会つた時に、全てを話してあつた。その事は柊も知つているはずだ。柊がコーヒーをいれると言つて席を立つと、彼女が僕のそばに来て言つ



た。

「どういう事なの？ どうなっているの？」

「柊がうそをついたのさ。そのノートに書かれてある事は全部本当の事だ。なんなら彼の素性を調べたらいい。そういう仕事をする人間が、きみ

の周りにはいるはずだ。身元不明に記憶喪失。怪しいところがたくさん出てくる」

妹の表情があいまいになり、僕は気づいた。

「もう調べたのか？」

「父と母が調べたの」

「それで来たのか！ 両親に言われて。偵察に来たのか！」

理由のわからない怒りがこみ上げてきた。

「違うわ、涼兄さん。内緒で来たのよ。友人の所へ行くと言って。今、涼兄さんが一緒に暮らしている人が、あのノートの人じゃないかと思ったから来たの」

「言ったのか？ あのノートの事。きみの両親に話したのか？」

「いいえ。話してないわ。私だけにつて、あの時、涼兄さん、そう言ってたでしょ？」

安心はしたが、怒りは消えなかった。そして、

別の不安が心を締め上げる。

「そのほうがいいよ。心配させるだけだから」

「心配なんて、させておけばいいのよ。親なんだから。私が話さなかったのは、兄さんが秘密だつて言ったからよ。私には信じられなかったけれど、何か大事な事なんだつて思ったから」

彼女の僕への信頼がうれしかった。

「…すまない。疑つて悪かった。」

信じてくれなくてもいい。でも、柊がこの世界に居られるのは、ほんの少しの間なんだ。僕達を自由にさせてくれ」

妹が返事をする前に、柊が三人分のコーヒーを持って戻つて来た。なごやかに芝居を続ける柊。色白の、線の細い、長身の彼。まっすぐな黒い髪を時々うるさそうにかき上げる。にこやかにあいづちをうつ妹。見上げるように柊を見て、時々首をかしげながら、うつすらと笑う。何も知

らなければ、ふたりはどこか似ていて、僕はふたりが恋に落ちて、柊が僕の義弟になる事を想像してしまった。

「柊」

「…ん？」

妹を見ながら柊が生返事をする。

「女性とつき合った事はあるのか？」

思った事が、考え無しで口をついて出た。柊よりも、妹の方が驚いた顔をして僕を見た。

「ああ。僕は同性愛者じゃないからね」

意味ありげに、柊は僕に向かって答え、次に妹の方を見ながら言った。

「だけど、心配しなくてもいい。親友の妹をくどいたりほしくないよ」

そう言つて、華やかな笑顔を作つてみせた。妹が真っ赤になつて下を向き、横目で僕をにらんだ。僕も、考えていた事を見透かされたようで、

赤くなつた。

夕食を、と誘う柊に断りを入れ、妹は帰ると言った。そして、ドアの前で僕に、何か困つた事があつたらいつでも言つてとささやいた。

「兄さんの力になりたいの」

「いつも僕の事を兄さんとよんでいるの？」

初めて会つた時、なんとよべばいいのか、と聞く彼女に、僕は涼と呼び捨てにしている、と言つた。その日彼女は、言いくそくに僕を涼とよんでいた。今日は涼兄さんとよび、最後は兄さんだけになつていた。

「ええ。だつて兄さんじゃないの」

少し怒っているかのような、強い言い方だつた。成人してから突然あらわれた兄を、彼女はどう受け止めたのだろうか。

「それに…」

言いにくそうに、でもきつぱりと彼女は続けた。

「私が見さんと言うと、父と母が少し困った顔をするの。だから…」

思わず口元に笑みが浮かぶ。



イラスト／エーカ

「僕もさ。きみの父上をおやじとよんでるよ。そうすると母が困った顔をするから」

妹の顔が輝いた。

「私達、兄妹ね」

ドアを閉め、振り返ると、柊は柊に戻っていた。首のボタンをはずし、クッションを抱え、だらしなく床に寝転んでいた。

「僕達がここに來る事を、家族に知らせてあったの？」

だるそうに下を向いたまま、柊が聞く。

「ああ。會計士に知らせておいた。失踪だなんて、警察に届けられたくないだろ」

警察にきみの身元を調べられたらやっかいだ、と胸の中で続けた。會計士には引越しの事も伝えていたが、柊との同居は伝えなかった。だが、知られていた。

「それより、あとどのくらい居られそうなん

だ？」

柊のとなりに座りながら、聞いた。

「そんな事、僕にはわからないよ。少しずつ違和感が溜まって行って、その世界からはじかれるんだ。きみの世界はしつくりとしてて、なんだか長く居られそうだって感じるんだけどね。今度もそうだ」

「この前はどのくらいだった？」

「…二年足らずかな？ 一年と八ヶ月か九ヶ月だ。この前は、少し早く旅をした…」

柊にそうさせたのは、多分僕だ。

「無理をすれば抵抗できるけれど、疲れるんだ」

僕の質問に、柊はなぜだ、とは聞かなかった。

再会して半年…。あと一年半か、長くても二年。

逃げ切ってみせる、と僕は思った。僕は柊を守ってみせる。

夏が終わって、柊は近くのコンビニで働き始め

た。

「きみが働くなんて似合わないよ。まして、コンビニなんて」

僕は口に出してそう言ってしまった。柊は何も言わなかったが、軽蔑の目を僕に向けた。

義父から定期的に入金される生活費の他に、

誕生日、クリスマス、卒業、そんな節目には母から花束と小切手が届いている。義父と母の調査は完璧だったのだろう。柊の誕生日にも大きな花束と小切手が届いた。母のサインが書き込まれた、柊宛のバースデーカードが無ければ、僕らはその日が柊の誕生日とも気がつかなかったろう。ただ単に書類上設定されただけの日付で、柊すら忘れていた。

「金さえ与えておけば、僕らが悪事を働かないとも思っているみたいだ」

僕が不機嫌そうにそう言うのと、柘が大笑いをしなから言った。

「きみは本当にひねくれているなあ」

彼以外の人間がそう言ったのなら、そいつとの友情も、そこで終わりだっただろう。柘の口からだど、なるほどそういう見方もあるのかと思えた。だが、自分の心を探ってみても、今更愛などと言われるのはまっぴらだった。世間体と言われるほうが、まだ安心できた。

「ありがたくいただいておりますよ」

柘はそう言つてでかけて行き、大量の酒を抱えて帰つて来た。翌日が休みなのをいい事に、その晩僕らはしこたま飲んだ。うつすらと覚えてゐるのは、僕が木の床に座りこんでビンの栓を抜き、もう飲めないと感じた事だ。そして、自分にかけてやうとしたら、柘が止めた事だ。

「そいつは高かつたんだ」

そう言つて、柘は這うようにして僕のそばに来了。僕はぼんやりとビンを見つめ、近寄つて来た柘を見つめ、そしてその酒を柘にかけた。

「やめろっ！」

僕の手から酒を取り上げた柘が、今度は僕にそれをかけやうとした。僕らは笑いながら、手当たりしだいに酒をかけあつた。気がついたら、翌日の昼になっていた。酒でべたべたになつた服が部屋のあちこちに散らばつていて、かろうじて着ている服も肌張り付いていた。ずきずきする頭と、泥のような体を引きずつて、僕らは代わる代わるトイレに行つて吐いた。トイレのそばの床にふたりして倒れこみ、時々目を合わせて笑い合つた。

柘がバイトで稼いだ金を僕は受け取らなかつた。秋から冬にかけて、その金で、柘はたくさん

の球根や苗を買ってきて、庭に植えた。

クリスマスにも、母から柊あてに小切手が届いた。僕への小切手と合わせて、僕らは夏と同じコテージを借りて、そこで年を越し、正月を過ごす事にした。雪景色となった風景を見て、柊が故郷に似ていると言った。秋になり、色を失っていく柊の故郷の自然。僕はいつか一緒に見たいと彼に言った。柊は答えなかった。

春になってバイトを辞めた柊は、庭いじりに夢中になった。

貯めていた金で肥料を買い、小さな庭は柊が植えた花であふれた。

二年目の夏にはコテージを一ヶ月借りる事にした。それだけの金はあった。柊は反対しなかった。一年目につけておいた池に、罌をしかけて小エビを採り、沢では沢蟹を獲って食べた。あけ

びのつるを取り、かごを作り、そのかごで草を集め、その草でふたりのTシャツを染めた。倒木を薪にして、暖炉に火を入れた。集めた木の実を、その暖炉の火で焼いた。全ておじいに習った事だ。

「父と…違うなあ」

と、柊が言った。花摘みも、花から作るジャム作りも、柊の方がうまかったという。

「父さんはすぐに花の種類を間違っていたんだ。

…だから、僕の方がうまいと思っていた」

その事がうれしかった。自分の中に、柊の父と張り合う自分を感じて苦笑した。

柊と再会してすでに一年半近く経っている。柊が旅立つのはいつなのだろう。 ……続く

写真ノレイラ・アズナブル

